

作品コメント

《(シュル) レアリズム旅行団》

奈良県生駒市にある山上遊園地と自宅近隣の公園にある遊具を主なモチーフとして、それらが空中を浮遊している情景を描いた。

最新技術を駆使したテーマパークが乱立する現代にあって、一昔前の遊園地の光景や公園の遊具は、時代錯誤とノスタルジーを否応なく生じさせる装置として現実世界を生きている。

それらの存在は、現代に生きる人間を楽しませるだけでなく、過ぎ去った記憶や時間の厚みを包含し、経年変化した物質性とともこの世界に漂っている。それらの存在は、今後実用性を失ってしまうかもしれない切なさを身にまとっているが、ふとした瞬間に幻のように心に舞い戻ってくる可能性を有しているように感じる。

それゆえ、時代遅れになったこれらのモチーフは、未だ現実世界に存在しながら、幻想の原型として、あるいは夢や想像の世界を開くためのゲートとして、最新のテーマパークに劣らず機能していると考ええる。

本作ではこれらのモチーフが空中を浮遊し、夢や想像の世界へと人々を誘うために高らかに宣伝を行っている。

《ゴミの見る夢》

使い古されたものや本来の機能を失ってしまったものたちが、列をなして画面中央の奇妙な装置に入っていく。画面左では、装置から伸びたスライサーが、ゴミを裁断しており、裁断されたゴミたちは CD-R として生成され、その記憶が保存されている。地に落ちた CD-R はドロドロに溶け、そこから全身が CD-R で出来た怪物（メモリーちゃん）が生まれている。

現実世界においても、ゴミたちは、本来の機能や姿形を失っても私たちの生活の中に何かしらの形で舞い戻ってくる可能性を有している。人間が生み出したゴミから生まれた記憶の総体としてのメモリーちゃんが生み出されるまでの製造工程を描いた。

《ファンファーレ》

作者が12年間共に生活している飼い猫をモチーフとして描いた。作者の猫

は、屋外に出ることを大変怖がり、動物病院などに連れて行く時は始終不安そうな鳴き声をあげている。

作中では、巨大な猫が移動用ケージから出され、風船が舞い飛ぶ野球スタジアムに登場する情景が描かれている。どこか知らない場所に連れてこられた猫には、人間の知覚する現実的世界とは異なる幻想として映っているのかもしれないと想像して描いた。

《Trush Gang》

ゴミなどの様々な人工物で出来た人物5人を並べて描いた。これらの人物は、西洋の画家たちの自画像をモチーフにして描いている。右からセザンヌ、ゴッホ、クールベ、安井曾太郎、ルドルフ・ハウズナーである。

画家たちが描く自画像は、鋭い眼差しを鑑賞者に向け、しばしば無頼漢のように見えることすらある。本作ではこれらの画家たちが世界の多様な側面を鋭く観察する姿を、現代の人工物で出来たギャングスターに見立てて描いた。

《環境音楽》

15世紀イタリアの画家コズメ・トゥーラの《奏楽天使に囲まれた聖母子》を下敷きに描いた作品である。コズメ・トゥーラに代表されるイタリアのフェッラーラ派の絵画における硬質で神経質な形態と濃密な色彩表現は、作者の絵画観に大きな影響を与えている。

本作では、原作の主題にちなみ、日常にある音を発するものをモチーフとして祭壇画の様式で構成した。宗教における聖性を有する音楽と、日常の環境音を重ね合わせたイメージを表出することで、俗の中の聖、聖の中の俗を両義的に表現することを試みた。